



脱原発世界会議 2012YOKOHAMA 企画報告書
シアタープログラム

文責：ピースボート 島田歩

1月14日 13:00～17:00 東京平和映画祭 presents 脱原発映画祭

登壇者（司会・進行・MC）：きくちゆみ

企画参加人数：のべ約200名

【第1部】 ～原発の真実と嘘～ （13:00～14:50）

①「源八おじさんとタマ」（15分・中村徹 2011年制作・アニメ）

子どもでも分かる、かわいらしいアニメによる分かりやすい軽快な構成で源八おじさんと猫のタマが『原発ってどうなの？』にお答えします。

②「原発ほんまかいな？」（75分・PARC 2011年制作）

八百屋で買い物中の二人の関西の主婦が井戸端会議形式で電力会社の嘘とボケにまじっっこみしながら原発と放射能の危険性をえぐり出します。

③ディスカッション

上記の2本の映画を見て感じたことや疑問に思ったことを共有し、発表していただきました。知ることの大切さ、知ったことを共有し、つながった人たちとともに立ち上がる勇気を持つことの大切さを実感できた。

【第2部】 ～子どもたちを放射能から守る～ （15:00～17:00）

①「チェルノブイリ・ハート」（61分・マリアン・デレオ監督・2003年制作・米）

第76回アカデミー賞ドキュメンタリー短編賞を受賞した話題作！チェルノブイリ原発事故から16年後の、「ホット・ゾーン」と呼ばれる高濃度汚染地域の現実に迫ります。16年たっても続く被曝被害の現実とは？！

②「子どもたちを放射能から守れ！福島のだたかい」（37分・湯本雅典 2011年制作）

東京ビデオフェスティバル優秀作品賞受賞！福島県で学校の先生をしていた監督が、今も続く福島のだたかいをリアルに追った臨場感あふれる傑作！

③福島からの報告とディスカッション 福島からの報告：大賀あやこさん

子どものためには福島を離れた方が良い。けれどそれでも福島に残る人もいる。福島を少しの間でも離れると身体が軽くなり、呼吸もしやすい。けれど福島に残る決断をした人たちに後ろめたさを感じる。自主的に避難した人たちにも補償を与えるべきか否かの裁判の判決には、混乱を予想した警備隊が集まり、メディアからの注目も高かった。結局「自主避難者への補償はなし」の判決だった。集まった自主避難者は判決を受け入れることしかできず、判決に異論を唱える気力もなかった。あのとき、なぜもっと声をあげられなかったのか。避難していない人たちへの後ろめたさからか。涙ながらに語っていただきました。観客の中にも、この公判を傍聴していた人もおり、福島の人たちの葛藤を理解するとともに、何がしてあげられるのかを考える機会になった。もちこみ海外ゲストのポール・ジョバンさんも来ており、原発労働者を取りまく環境についてディスカッションの際に話していただ

きました。また、最後に「子どもたちを放射能から守れ！福島のだたかい」の監督の湯本雅典さんが会場に駆け付け、制作までの過程や制作を決意した理由などを語っていただきました。会場には、ほかにも福島で小児科を営むドクターもおり、震災の後小児科医を引退し、放射能が子どもに与える影響についての講演を全国で行っているとのこと。

1月15日 10:00~11:40 「第4の革命 エネルギー・デモクラシー」上映&監督トーク

司会・進行：島田歩（ピースポート）

登壇者：関根建次さん（ユナイテッドピープル）、カール・A・フェヒナーさん（映画監督）、伊藤千尋さん（国際ジャーナリスト）

企画参加人数：約350名

- ・「第4の革命」の配給会社代表の関根さんからの挨拶
- ・「第4の革命」ダイジェスト版（約20分）の上映
- ・「第4の革命」のカール・A・フェヒナー監督からの映画制作までのいきさつやフランスの原発で発電された電気を購入するドイツのお話などを逐次通訳で。
- ・伊藤千尋さんとフェヒナー監督の対談。四国のとある村が風力発電所をつくり、わずか5年で黒字が出るまでになったという話、日本は火山が多いので地熱発電に力を入れるべき、など
- ・質疑応答：伊藤千尋さんに「14日の朝日新聞の脱原発世界会議1日目の記事は小さすぎ、目立たなすぎ。どうして？」と質問した若者がいた。伊藤千尋さんは「朝日新聞の原発に対するスタンスは『Yes, but』。良くない部分もあるが基本的には原発推進であり、そうでない記事は大々的には扱ってもらえない。この方針に反対するとクビになってしまう。しかも原発に関する記事を書くのは科学部という部署で、社会部ではない。しかし、新聞を読むのは一般市民の読者であり、一般市民が読みたいと思う記事を書くことも新聞社の務めなので、市民であるみなさんがもっともっと声を大きく原発からの脱却を訴えていけば遅れている日本のメディアも少しずつ変わっていくだろう」フェヒナー監督からは「ドイツでも30年前のメディアはみんな原発推進だった。30年かけて市民の声が少しずつメディアを変えていったのです」と同調した。

反省点：座席が120のところ約350人を入れた。本当はある程度で入場制限をかける予定だったが、フェヒナー監督がぎりぎりまで入れていい、と言ったので入場制限しなかった。壁沿いに展示していた写真展のパネルに寄りかかったり（満員電車状態だったので仕方ないが）する人がおり、大きな写真パネルが企画中に3枚ほど落ちた。人々の熱気で会場の温度が上がり、参加者の中には暑すぎると感じる人も多かったようだ。

1月15日 12:00~16:00 ポレポレタイムス社の映画2本立て 「ナージャの村」&「祝の島」

登壇者：本橋成一さん（「ナージャの村」監督）

企画参加人数：のべ約500名

- ・各映画とも満席で、立ち見も総座席数以上いた。
- ・ナージャの村の写真展があったのだが照明や人の出入りの関係上、写真をじっくり見るのは15日は無理だった。
- ・映画の上映と本橋さんのお話で時間が一杯いっぱいだったのでお客さんのフィードバックなどの時間はとれなかった。

1月15日 16:20~17:00 原発事故の現場 - 原子炉建屋に最接近したジャーナリストの証言

登壇者：今西憲之さん（ジャーナリスト）、伴英幸さん（原子力資料情報室）

企画参加人数：約250名

- ・今西さんのビデオ映像を早送りしたり再生したりしながらの話に伴さんが専門的な解説を入れる、という進行方法。
- ・時間が短かったため質疑応答などの時間はなし。

1月15日 17:05~18:00 山本太郎の直接行動ワークショップ

登壇者：山本太郎さん（俳優）、佐藤潤一さん（グリーンピース）、鈴木まいさん（グリーンピース）

企画参加人数：約250名

- ・山本太郎さんがドイツに行って、放射性核廃棄物を乗せた貨物列車がドイツ国内を通過することに反対する抗議デモに参加した時の映像とお話。山本太郎が警察に「強制撤去」される場面も。グリーンピースの佐藤さんが、その場面での山本さんの振る舞いについて解説。「デモに参加する時は両手は身体の前にし、決して腰より高い位置に上げないように。→後ろに手をやっていると武器を隠し持っていると思われる。腰より上げると殴りかかろうとしていると思われる。」また、「カメラが向けられている時はきちっと振る舞うこと。だらしない動き（ポケットに手を入れていたり）をしているとメディアに逆手にとられるので、常にカメラを意識すること」など、今後デモに参加しようと思っている人に役立つ細かなアドバイスが行われた。
- ・時間が短かったため質疑応答などの時間はなし。
- ・山本太郎さんの退場時に外で待ちかまえている人が何名かおり、一時騒然としたが、ことなきをえた。